

アン・ハドソン・ジョーンズ編著

『看護婦はどうみられてきたか』

「あとがき」にある出版経緯を読むと、まさしくこの訳書の出現が生まれるべくして、一つの日本の看護の転換期に生れたという思いが湧く。「この本は Images of Nurses: Perspectives from History, Art, and Literature (Edited by Jones, A. H. Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 1988) の全訳で、看護ないし看護婦を、社会と時代を通して変容しながらも連続する〈表象〉にとらえ、そこに映し出されている多様な価値観を、文学・美術・大衆文化・建築学・歴史学・心理学・女性学・医学史・人間科学などの多領域から探索した刺激的な論文集である。」と述べられている。監訳者の中島憲子さんを含む大阪大学医学部環境医学教室（この十月三十日に医のあり方を問い続けて亡くなられた、中川米造先生が教授であられた。）の若手研究者達の手によって完訳された。

当時中川研究室では、先生指導のもとに、歴史学・社会学・文化人類学・倫理学など、人文・社会科学系の研究者を医療・看護の現場で働く人達が集まり、領域横断的交流をモットーに定期研究会が開かれて居た。そこへ時空出版から中川先生を通してこの翻訳が持込まれ、関心を寄せた五人が様々な困難を乗り越えて中断することなく八年近い年月をかけて、一九九七年五月刊行された。

本書と彼女達の出合いは、問題意識と方向性を同じくする

海の向うの仲間との出合いとも云うべき新鮮な体験だったと云う。

この間の年月はまた、日本に看護大学が数多く設立をみた時期であり、もはや「白衣の天使」や「泣き賃ガール」でない新しいナース像が求められ生れようという時代になっている。関西では中川教授の先見性が導いた学際的な視野からの研究がこの本に結実し、関東でも東京大学で社会学的立場から看護婦問題が研究に取上げられていると聞く時、「看護」が「看護問題」と共に「人間の課題」して追求される時代に入ったことが意識される。この本の内容は、まさしく特質がそこにあると云えよう。

編集者の A・H・ジョーンズは、テキサス大学の医学系で看護大学院生を対象とした総合人文科学コースの中の一つの科目「アメリカ文学及映画の中の看護婦のイメージ」のテーマを受持った。そこでの学生の意欲と関心の強さに触れて、学生が自分の職業を外部からみつめる学習を非常に望んでいるにもかかわらず、こうした研究は殆ど進んでいないことを知って、助成金を得て論文集を産み出す優秀なプロジェクトを組織した。米国の「文学と医療」誌に集まった各州の大学や専門領域で活躍する研究者を中心に、歴史・美術・文学の専門家（その大半はフェミニストの人文科学系の人々）十名に依頼し、各分野における「看護婦のイメージ」に関して論文を書くよう求めた。そしてお互いにその論文を読み、一堂に集って専門領域の境界をこえて討議し、その結果を論文に反映

し加筆修正され、成果のみのつた論文集ができたという。

編者は「その共同研究で私は、学際的な女性学研究の理想像を目的のあたりにしたように思う」と語っている。私達は日頃、看護婦問題の女性学検討の必要性を痛感しながら果せないで来た。その重要点を先ず序論が展開している。即ち看護は女性一般のメタファとして今日も存在している。看護の歴史の中にみられる女性観の反映としての矛盾にみちた看護婦の肯定的否定的イメージは、ケアの社会的価値の正当視が確立すること無しには消失しないこと。女性、女性労働、看護、の地位はこれまでもこれからも相互関連していると述べられている。

本文内容は、十編の論文が大きく三つに分けて構成されている。「第一部・視覚芸術におけるイメージ」には、①フロレンス・ナイチンゲール以前（絵画・彫刻）。②イメージが現実か（写真）。③象徴としての建築。「第二部・文学のなかのイメージ」。④フィクションと大衆文化に見る看護婦のイメージ。⑤看護婦。⑥「特殊な関係」。⑦生命の信奉者たち。「第三部・社会問題とイメージ」。⑧ワシのように舞い上がれ（黒人看護婦をめぐる歴史イメージ）。⑨イメージと理想（看護の社会化と性差別）。⑩白衣の天使（ハリウッド映画でのナイチンゲール像）となっている。

私達は看護史研究会というささやかなサークルで、やはり七年の年月をかけた共同討論により、「看護学生のための世界看護史」を一九九七年三月にやっと刊行した。その立場から

は、やはり文化財で看護の歴史を立証する第一部が一番ひきつけられた。古代では少ない史料であまりの断定ぶりに驚きつつも、私事としての看護が時代と共に社会的要求により公事としての看護へと変る。そこでの新旧キリスト教の役割が実証的にのべられる。病院と看護婦養成の密着度やカリキュラム変化で変る看護婦宿舎の建築物の象徴性など確かな指摘に教えられた。第二部は多様な、高級・大衆文学と看護についての論及。第三部は今日的な看護問題の鋭い指摘と批判に満ちていて誠に刺激的。刊行を深く感謝したい。

（坂本 玄子）

〔時空出版社・〒112-0002 東京都文京区小石川四一―八―三、☎〇三―三八―二一五三二五、一九九七年七月発行、A5判、三二八頁、二、九〇〇円〕

小曾戸洋著

『中国医学古典と日本―書誌と伝承―』

わが国では、古来、多くの古医籍が秘蔵伝承され、中国古典医学研究のための一大宝庫となっているが、それらがマイクロ複写による利用や影印刊行によって広く一般に流通するようになったのは、ようやく一九七〇年代半ば以降のことである。本書の著者・小曾戸洋氏はこうした研究環境の熟成を踏まえ、一九七〇年代後半から善本医書の本格的な研究を精力的に行ってきた。本書は、著者が二十年余の研究過程で発表した数多くの論文の中から、中国古典医学についてのそれを